Catch! the entertainment

イベント・ライブ・演劇に映画、CDリリースから書評に至るまで、骨太entertainmentを丸飲み！

RELEASE 発売中

チャイナ・ディスコティカ／Aira Mitsuki

都カラ都へ、音楽的以心「電信」通ズ。未来で生まれたテクノポップ・アイコンって？

日本のバブル最盛期、お姉さんが夜な夜なディスコのVIPルームでフルーツ盛りをオネダリしていた頃、中国のディスコではヒマワリの種をツマミにコーラがスタンダードだったとか。今のイケイケドンドンな中国のお国事情からは隔世の感である。昨年12月号でインタビューしたAira Mitsukiの歌がネットを駆けめぐり、火が付いたのが北京だというのも、その証拠だろう。一連の問題に関する対応は「そりゃないぜ！」だが、Aira〜が北京に乗り込んで行ったライヴは盛況だったそうで、政治と音楽はパラレルのようだ。

そんなわけで、晴れてメジャーデビュータイトルとなった（というか、レーベル自体がメジャーになったというおめでたい話で、それがまた弊誌と兄弟分にあたるわけで、このあたりテマエミソですみません…）同作は北京オリンピックへのリスペクトソングに。

古くはゴダイゴ、135、最近ならMONKEY MAJIKが「チャイナ音階」をフィーチャーしているけれど、TECHNO POP×ELECTRO HOUSEでそれをやるとこうなるっていうお手本サウンド。守ってあげたい感ぶりぶりな声も健在。今後は大胆にも大沢伸一やFPMに楽曲提供をオファーするという構想もあるらしいし、昨年のKMF2007には鈴木亜美も来てたし、今年は日本の都でも火が付くといいな。

（竹中　聡／本誌）

■「チャイナ・ディスコティカ／Aira Mitsuki」■ D-topia Entertainment　VUCD-35001　1260円（税込）

街場の演算

肩の力を抜いて、自由に語ろう…、京の街と付き合うということを。

保伊戸宵（ほいとよい）

【第8回】

世界の都市は地下鉄・地下街によって、歴史や文化を守って近代化を達成した。で、やっと今、東西線な、京都なのである。

京都という町は、掘れば掘るほどややこしいものが出てきて、「やれ、平安時代の…何々」やら「これって、何々の宴の残骸？」てなぐあいになったとたんに掘るのはやめ〜！ ということで「地下鉄なんてものは永遠に出来ない」と、まるでサイバーシティな大阪・名古屋の地下鉄&地下街に出かける度に、親から聞かせられていた保伊戸少年。

それから30年以上、京都も大阪・名古屋とまではいかないにしても、全国レベルでは結構地下が発達した都市となってきた（ような気がする）。パリやロンドン、はたまたニューヨークの発展は地下鉄抜きでは語れないし、語れないからこそ、京都は近代において地下鉄&地下街が造れないというジレンマにさいなまれていた。そう、地下を近代化させることで町家のみならず、道すがら日本という国を感じさせる京の街並みをもっと残せたはずである。パリ、ロンドン、ニューヨークはもちろん、大阪・東京もそれに成功していると行って過言ではない。そう、地下に手をつけられなかったことが、文化を残しながら近代的な都市計画を描くことが出来なかった京都の20世紀の悲劇だったとは考えられないだろうか。

今まで、バス停として通過するのがオチだった場所に駅が出来ることによって新しい光があたり、京都の歴史と文化が蘇り、かつ新しい店や街の様ができてくる。そ

© 荒井健

ウェストサイド物語

STAGE ~7.21 (Mon)

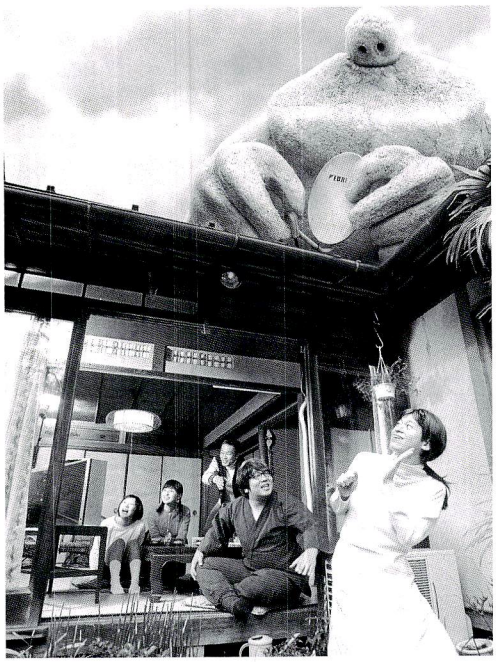
古今東西、障害ある恋こそ、熱く烈しく燃えるもの。

切なくも美しい悲恋物語として長らく愛されているシェイクスピア原作「ロミオとジュリエット」へのオマージュをも感じさせる青春ミュージカルが、13年ぶりに関西上演されている。それも、京都一有名と言っても過言ではない京都駅ビル内の京都劇場で。1974年の初演以来、劇団四季の代表作として900回以上もの公演回数を誇る作品を、知らぬと言ってくれますな。いつの世も、悲恋には障害がつきもので、それが敵同士ともなれば燃え上がる恋情を抑えられぬのも致し方ないこと。最近で言えば、「大奥」ばりの禁断である。ああ、禁断ってなんて誘惑的な響き…。アタクシには縁のない言葉でしょうが。

1961年に公開された映画を入口に同作を知った諸君も多いことだろう。ならば、映画の街に住む者として、原作の魂を受け継ぐ舞台を素通りするのは愚行というもの。本作を四季入門としても悪くないはず。

（山田涼子）

■「ウェストサイド物語」■ 京都劇場　■ 公演期間：～7月21日（月）／上演時間：約2時間55分（休憩含む）
■ 一般通常料金：S席１万500円、A席8400円、B席5250円、C席3150円　■ 日本プロダクション／演出：浅利慶太
■ オリジナルプロダクション／演出・振付：ジェローム・ロビンス
音楽：レナード・バーンスタイン　作詞：スティーブン・ソンドハイム　台本：アーサー・ローレンツ
■ http://www.shiki.gr.jp/applause/wss/



ヨーロッパ企画第26回公演

あんなに優しかったゴーレム

～やったね10周年ツアー～

STAGE 5.15～ (Thu)

どんなメディアで活躍したって、やっぱり源は京都で舞台。

アタクシ、映画「サマータイムマシン・ブルース」を入口にヨーロッパ企画を知ったクチ。多いんじゃないでしょうか、そういう人。彼らは同志社大学の演劇サークルを原点とし、自作の芝居が映画化されようと、団員がドラマやCMや映画に出演しようと、雑誌やWebに連載を持とうと、いまだ二条に拠点を置く京都人の鑑的演劇集団である。

以前、弊誌でご紹介したこともある脚本担当の上田誠氏は、工学部出身。ゆえに、綿密に調べてプログラムを組むがごとく台本を書く。その綿密さが、ヨーロッパ企画の最たる武器。観る者を唸らせる緻密な展開は、「やられた！」と思う瞬間がいっそ快感で、それは今回の芝居でも大いに期待したいところ。

タイトルから察するに、ゴーレムの話。ゴーレム優しいの？ しかも優しかったってことはいなくなるの？ その前に、どんなゴーレム？？ ハテナがつけばつくほど、上演が待ち遠しくなる。

（山田涼子）

■「京都府立文化芸術会館『あんなに優しかったゴーレム』」 ■5.15.（Thu）～5.17.（Sat）
■一般2900円（当日3200円）、学生2000円（当日2300円）■作・演出：上田誠
■出演：石田剛太、酒井善史、諏訪雅、角田貴志、土佐和成、中川晴樹、永野宗典、西村直子、本田力、松田暢子、山脇唯
■http://www.europe-kikaku.com/

れが今号の特集でよくわかる。どう考えても今の京都の動脈は四条通である。が、四条通はトラフィックの分散が激しく、要ではあっても個々の街の連動性が点から線へとなりにくいという弱点がある。ところが、東西線が走る三条通＋御池通は、地下鉄が歴史街道を結びつけるというか、観光資源と新しい店や建物の結びつきが、真新しい街を形成するダイナミズムを持っていると感じるのは、言い過ぎだろうか？

浜大津から京津線で山科へ。それだけで、この東西線が現代の東海道だということが実感できる。蹴上には、村野藤吾による都ホテルが「ウェスティン都」になって、なんと新日本プロレスがディナーショー形式の大会を開いているし（そうそう、中邑選手や天山選手、中西選手も京都出身でしたね）、南禅寺や瓢亭へのアクセスもこの駅からすぐ。振り向き観音の永観堂も。東山では平安神宮～一澤信三郎帆布というのが定番のコース（もちろん白川を眺め、古川町商店街を抜ける）。市役所前では、寺町を上ル下ルするもよし、御幸町にはコム・デ・ギャルソンもある。そして、「イル・ランポ」も「ポキート」もここが最寄りの駅だ。

御池には国際マンガミュージアムがある。ここで忘れていけないのが、市役所前から二条駅までは御池通に駅があるが、この区間の２本南の東西の通、姉小路通と三条通、そして北の二条通、押小路通が老舗と今どき店の混交ストリートとして目が離せないことだ。今回の特集でクローズアップした店の多くが、このポイントの店である。

チャリンコで京の碁盤の目を縦横無尽…、もいいけれど、東西線は前述の平安神宮、そして御所や二条城、はたまた六角堂（の東に本誌編集部はあります）などなど、歴史的建造物と今という時代を繋ぐ、重要なトラフィックであり、使いこなすほどに遊びも仕事もダイナミズムが生まれてくるそんな交通機関というか、手段である。そう、なぜ東西線なのか？ これに気がついている京都人は意外に少ない。

保伊戸宵（ほいと・よい）／そろそろ、神輿シーズンがやってくる！ うーん、例年になく待ち遠しいのは何故だろうか？ 4月末、松尾大社に伏見稲荷、藤森神社の3連発。みなさん見学よろしく。え？ 東西線？ しょっちゅう乗っています。